

河地重蔵著

## 『毛沢東と現代中国——社会主義経済建設の課題——』

ミネルヴァ書房 1972年 6+243ページ

## I

かつて香港に住む中国人の友人が来日したとき、かれの夫人（ごく普通の家庭婦人）がプロレタリア文化大革命の前に山東省の実家へ里帰りして、中国ではふたたび革命が起こるにちがいないとの印象を得て香港に帰り、友人達にその話をしたところ、左派の友人たちはてんで相手にしなかったが、一度文革が起るとかれらは口をつぐんでしまった、という話を聞いたことがある。たしかに、文革は全世界の耳目を聳動させるにたる大事件であったし、それがあまりにも巨大な変革を実現せんとするものであったがゆえに、外部からの観察者にはその一部分を全体像ととりちがえるような悲喜劇も随所にみられたのである。中国共産党第9回全国大会からすでに3年を経過した今日、まだ包括的な研究書があらわれないのも、ある意味ではしかたないことであろう。

ここにとりあげる河地重蔵氏の『毛沢東と現代中国』は、毛沢東の農民革命論の形成とその前提および社会主義建設への投影を論じたものとしてきわめて注目すべき一書である。本書は著者のここ10年来の現代中国研究の成果のなかから、若干篇をえらんでこの1月に上梓されたものである。著者、河地重蔵氏が、京都大学文学部東洋史学科を出て大阪市立大学経済学部で教鞭をとる社会経済史の専門家であることは周知のところであろう。また氏が最初、中国古代・中世史研究者として出発したが、現在では現代史の方面でも屈指の存在であることも衆目の認めるところであろう。

本書『毛沢東と現代中国』は、〈社会主義経済建設の課題〉との副題が付されており、著者の意図が明示されているのであるが、その内容は以下のとおりである。

- 第1章 文化大革命と中国社会主義の特質
- 第2章 毛沢東の中国経済観と文化大革命
- 第3章 毛沢東の農民革命論——毛沢東における「中国社会主義」の特質の史的形成過程——
- 第4章 旧中国の農村経済体制と村落
- 第5章 アヘン戦争以後のウェスタン・インパクトと

中国の農村経済体制

第6章 1930年代の農業生産力構造と社会主義建設過程における動向

第7章 中国における農業発展政策の変遷

第8章 文化大革命と農業発展政策

これらのうち第1章は本書を編むにあたって序説の意味をもたした書きおろしであり、他は雑誌等への既発表論文なのであるが、収録にあたって重要な論旨に及ばない範囲での加筆訂正を行なったという。この態度は一般的にあって歓迎されるべきものである。

## II

著者は「はしがき」の冒頭で、「中国はいまや特異なる社会主義国として、世界史上に巨大なる地位を占めるにいたった。……中国の存在は一つの挑戦を意味している。……この挑戦は、少なくとも中華人民共和国成立以後変ることなく存在してきたが、痛切な反省をともなっておもいらせたのが、こんどの文化大革命であった」と述べているが、本書を通読して感ずる第一の印象は、「痛切な反省」をふまえた真摯な研鑽が「特異な社会主義」の強調に終始していることの不思議さである。それはおそらく著者の方法論に起因するものであろうが、その方法論とは

- (1) マルクス・レーニン主義の枠組のなかで中国に接近する方法
- (2) 低開発国発展論の枠組のなかで中国に接近する方法
- (3) (1)(2)両者を水平に交えた交点を垂直につらぬく歴史的アプローチの方法

の3者を併用するものである。著者は本書が歴史的アプローチに重点をおいておこなってきた研究を集めたものであると慎重にことわっているが、この方法論を適用した痕跡は随所にみられるのであって、それが本書の分析・叙述の不統一をきたす原因となっている。

さて、本書は著者みずからの言にしたがえば、第1章から第3章までが中心で、以下の5章はいわば補論であるとのことであるが、見方によっては第2章をも含めて、すべて第3章の補論であるといえよう。なぜなら、第3章は量的に全体の3分の1を占めるのみならず、著者の問題関心とそれにたいする解答の重要なものがほとんどそこに網羅されているからである。したがって、以下に第3章を中心としながら、必要に応じて他の諸章にもおよびという形で筆をすすめることにしたい。

## III

第3章で述べられる「毛沢東の農民革命論」は、誤解を恐れず大刀闊斧的に私なりの要約で整理すればこうである。

- (1) 国民革命の時期——古典的ブルジョア革命をめぐっているが、半封建的な郷紳支配体制の打倒をめざすブルジョア民主主義革命
- (2) 革命根拠地の時期(第2次国内革命戦争期)——マルクス・レーニン主義の教義に反して農民による農村ソヴェト＝革命根拠地を建設し、地主制一般の廃棄をめざす、実質上のプロレタリア革命
- (3) 抗日統一戦線の時期——農村革命根拠地を核とした、その原則の具体的応用としての統一戦線政策
- (4) 社会主義建設の時期——農民革命論的思考様式の展開としての人民公社化政策、3大差別解消等、そして、新たな共同体原理の再生

みられるように、著者の論題にもっとも重要な意味をもつのは(2)の時期(本章の第3節にあたる)なので、まずここから問題にしよう。それをより詳しくいえば、この時期に原型が形成された毛沢東の農民革命論の独自性は「第一に、農民の革命性にたいするマルクス主義的教義にとらわれない確信であり、第二は、中国の与えられた政治的経済的条件のリアルな分析にもとづく農村革命根拠地建設の可能性の論証であり、第三は紅軍の確立とそのプロレタリア化による指導的役割の重視である」(89ページ)(傍点は著者)ということである。そして、これは「社会主義をめざす連続革命の一段階たる実質をもちながら、しかも社会主義革命にかんするマルクス主義の教義からみて独特のもの」(94ページ)であり、「毛沢東あるいは中国の特異な社会主義への途の出発点」(94ページ)をなすものだったとされるのである。

農民の革命性と根拠地樹立・紅軍確立を結びつけたことを毛沢東の創見であるとするのには私は賛成である。しかし、マルクス主義の教義に反してということ強調し、特異な社会主義と断定するのは問題であろう。たしかに著者のいうようにマルクスやレーニンの農民の革命性や農村ソヴェトを論じた文章と毛沢東のそれを平面的に並べ較べれば、そのような見解もなりたつし、毛沢東がそれらの教条を墨守する潮流との闘争の過程で新しい理論をつくりあげたこともたしかである。実際、本章でべられているコミンテルンとの関係・党内闘争史的部分は、ひろく文献にあたり、叙述もきわめて精彩に富ん

でいるのであって、教えられる点がきわめて多いのである。しかし、マルクス主義とは“死んだ教義”なのであろうか。レーニンがつねに強調した“マルクス主義の魂”は生きた現実にたいする具体的な分析であったはずである。現に著者自身、独自性の第二に「リアルな分析」を指摘し、それを何度も強調していながら、なおかつ「教義」に反するからといって「特異」なものと断定するのは、いかにも理解に苦しむことである。ここに前引の方法論の欠陥の具体的なあらわれのひとつをみることができるであろう。つまり、低开発理論と並列される著者のマルクス・レーニン主義の枠組とは、ヨーロッパ・サイズに著者自身が固定したマルクス主義のことであり、それを尺度に毛沢東の理論を切ったことから生ずる欠陥なのである。一言つけくわえるなら、本章でいろいろと欠陥・誤謬を指摘した毛沢東の階級概念についても、第1章で毛沢東の理論は階級の基礎に生産手段所有制のみをとる古い教義の再検討を要求していると述べながら、自説を開陳していない点にもつながる問題なのである。

つぎに(3)の時期に、統一戦線を農村革命根拠地を核にした具体的適用とするのには賛成であるが、しかしそれはあくまで権力の問題であろう。この時期の農民革命論を説くためには、二五減租への政策転換の分析が不可欠であると考えられるが、著者がそこを「毛沢東の農民革命論が江西ソヴェト期から一貫していた」(105ページ)といて分析を放棄するのは遺憾である。統一戦線から民主共和国を展望する見解が毛沢東の新民主主義革命論の本質をなすものでないことは、著者のいうとおりである。そして、それが革命のヘゲモニー、推進者の性格から地主制の廃止がブルジョアの発展の途とむすびつかないという指摘にも賛成である。しかし、それだからといって、毛沢東の新民主主義革命は「社会的・経済的内容においても、……プロレタリア革命の実質をそなえたもの」(75ページ)といきれるであろうか。この点では、著者はレーニンとも毛沢東とも異なる見解をうちだしているか、私にはやはり、プロレタリアートの指導するブルジョア民主主義革命との把握の方がより整合的であるように思われる。なぜなら社会主義改造はやはり農業も商工業も合作化を起点とすべきであるということと、プロレタリアートないしその政党が社会主義をめざして採る政策はかならずプロレタリア革命的なものであるとするのは、あまりにも単純な上部構造と下部構造の対応論に墮するからである(もちろん著者は、単純な1対1対応論を述べているのではなく、フランス革命の検討を通

じてブルジョア革命のメルクマールを明確に設定し、ブルジョア革命を超えるものとして、プロレタリア革命説を提起しているのではあるが、その問題は後にふれる)。この革命路線におけるプロレタリアートの指導するブルジョア民主主義革命という二重構造は、毛沢東思想の精髓である大衆路線における人民大衆の小学生になれという主張と英雄モデルによる大衆指導と本質的には同じパターンに属するものであると考えられるが、この点については、別の機会を得てやや詳しく論ずるつもりである。

(4)の時期についていえば、農民革命論的思考様式が毛沢東の社会主義建設のあらゆる面にあらわれているとの指摘はそのとおりだと思う。この問題は、第2章・第7章・第8章においてそれぞれのテーマに則して、さらに具体的に論じられている。そしてこれは、たしかにある意味では「共同体原理の再生」といっていえないことはないであろう。ある意味というのは、共産主義社会への過渡期としての社会主義社会におけるコミュニティということであり、著者のことばでは、「生業＝生活単位」としてのそれである。しかし、けっして著者のいうような「中国農村の歴史的伝統の再生……を含意」するものではない。けだし「湖南農民運動の視察報告」をあげるまでもなく、新しい社会は古い体制を徹底的に破壊したうえに築かれるものだからである。ここで著者は毛沢東とクロボトキンの思想的基盤の「おどろくほどの類似性」を特に指摘し、その共通点として①近代社会の否定・超克の志向、②後進農業国の歴史的風土から育った革命思想、の2点をあげるが、それではいったいレーニンはどうなるのであろうか。アナキズムをもふくめて人類数千年の思想的遺産のすぐれたものが毛沢東の思想に影響を与えていることは、かれが好んで口にすると大同社会ひとつとっても明らかであるが、クロボトキンやさらにはバクーニンとの類似性を、とくに毛沢東の社会主義建設のヴィジョンとのダブルイメージで論じようとするなら、やはりアナキズムの理論とマルクス主義の理論との分水嶺である反強権・政治否定の問題を媒介に論ずる必要があるであろう。さもなければ、類似性の強調はたんなる現象羅列に終始するか、あるいは著者の強調する毛沢東の理論がマルクス・レーニン主義に反する特異なものであるとの叙述とむすびついて、おそらくは「いうまでもなく毛沢東はアナキストではない」ととくに断わってあるにもかかわらず、「マルクス主義思想の大きな潮流の中」におけるアナキスト的異端と位置づけしているかのような誤解をまねくおそれなしとしないであろう。もち

ろんレーニンが「われわれの最良の同志……もっともすぐれた革命家」とアナキスト労働者を呼んだことはよく知られているが、ことは思想の類似性の問題なのだから、その点の吟味が必要だというのである。

## IV

(1)の時期の問題を後まわしにしたのは、ここに著者が「はしがき」でいう、いわゆる東洋史学と現代中国研究の二つの領域のあいだの「あまりにも深い」断層を克服せんとする多くの問題提起がなされているからである。著者は前近代史と関連させて自分の見解を明確かつ体系的に主張しており、賛否はともかく、その大胆な提示に敬意を払いたい。

前引したように、この時期の毛沢東の農民革命論は、基本的にブルジョア民主主義革命論としての性格をもっており、(2)の時期に確立される原型の形成過程にあたりと著者は主張する。なぜか。「郷紳大地主支配体制と地主制一般を区別し、前者に半封建的支配を認め、これに小地主もふくめたブルジョア革命」(125ページ)として構想されたからだという。ブルジョア革命にたいする著者の理解は明快である。それは、フランス革命をモデルに、①封建領主制的土地所有の廃止(地主制一般ではなく)②地主制一般の廃止はブルジョア革命を超えるもので実質的にはプロレタリア革命、③中国での封建領主制的土地所有の明確な欠如、との3点をメルクマールとするものである。この規定によるかぎりいうまでもなくこの時期の毛沢東の農民革命論の性格は著者のいうとおりである。私はその結論に異を唱えるつもりはないのであるが、③の指標では二者択一的な規定だけが与えられ、プロレタリアートの指導するブルジョア革命という範疇がまったく考慮されていないこともやはり指摘したいのである。

著者のいう近世あるいは近代の中国ではたしかに封建領主制的土地所有は欠如していた。それではいかなる土地所有関係があったかといえば、著者は第4章でもくわしくふれているのだが、宋以後は近世地主制であるという。そしてそのばあい、明中期をもって近世を前・後期に区分するが、その近世地主制が下部構造に画期的な変革をみないまま近代に接続する、との見地にたつ。一般に中国では地主小作制イコール中国の封建制と考えられており、私もそれに賛成なのであるが、著者はそれをしりぞけていわゆる京都学派の近世説をとり、中国の地主小作制は封建領主制的土地所有と資本主義的地主制との間の過渡形態であり、地主資本は商業資本・高利貸資本

とならんで「貨殖資本」の「三つの顔」を形成する。と設定する。そして、貨殖資本は「小地方市場圏」を収奪の場とし、この経済的諸関係としての地主制のうえに政治的・社会的諸関係を体現する王朝支配と結びついた郷紳支配体制が確立されていたというのである。

貨殖資本なるものを上位概念におくことの問題を別とすれば、著者のシエーマは整合的であり、とりあげられる歴史的事実の評価も首肯しうるものである。しかし、封建領主制的土地所有の欠如がそのまま時代概念としての封建制の否定に結びつくかどうかということが論ぜられねばならないであろう。著者のようにフランスを尺度にせず、社会的富の生産が主要には土地に依存し、生産主体がいわゆる奴隷身分を脱していることを規準にすれば、地主＝小作制が封建制の中国における一実現形態であったと位置づけうるのである。しかし、ここでの意見のちがいは時代区分論ないし宋以後アヘン戦争までを近世と呼ぶか封建後期と呼ぶかの問題であって、具体的な評価の問題ではないので、いまは論じない。

ところで、アヘン戦争後の近代では、ことがらはどうなるであろうか。

著者は第5章で中国の近代を論ずるが、その基本的立場を「下部構造に画期的変革が生じたためというよりは、近代化の過程が、アジア後進国、植民地に特有の過程……反封建＝反帝国主義……に変質した」(151ページ)ことにもとめる。そして、「『半植民地』化」は開港都市・鉄道・鉱山等の「近代化セクター」では強くあらわれたが、内陸部への影響はなお間接的であったという。

ここで著者は毛沢東の規定である半植民地半封建社会という術語をもちいず、さらに「半植地」に引用符を付していることから理解できるように、きわめて慎重に自説を展開しているのであるが、半植民地化を半封建社会化とせよとするのみならず、近代化ととらえる観点は、現象としてそうであっても、中国革命ないしは中国近代史の本質的なとらえ方としては誤りであろう。半植民地半封建社会として世界市場にくみこまれた中国社会における帝国主義・封建主義支配者の対極に立つ中国人民が帝国主義をこえるものとしての社会主義建設の世界史的使命を担うものであることについては、かつて大まかな問題提起をおこなったことがあるが(拙稿「中国近代史における“資本のための隷農”の創出とそれをめぐる農民闘争」『新しい歴史学のために』99号)、反封建の課題が、まさに著者のいう「近代化セクター」に拠る帝国主義の支配の打倒と結びつけてうちだされざるをえなか

った点にこそ、世界近代史の不可欠の構成部分たる中国近代史の本質をみるべきであろう。

以上、きわめて大雑把に関心のある点についてのみ意見をのべたが、もちろん著者の論点をはるかに多岐にわたっており、ただ一例だけをあげるならたとえ労働生産性の問題を分析して、バックの不十分さを指摘した点(第6章)など、教えられることの方がはるかに多かったことを、最後にお断りしておく。著者の真意を誤解したり、見当はずれな批判もあるであろうが、一応これをもって書評の責をふせぐことにしたいとおもう。

(京都大学人文科学研究所助手 秋間直樹)